

明治日本の国粹主義と唱歌教育 —わらべうたや日本民謡はどのようにあつかわれたか—

城 佳 世

九州女子大学人間科学部児童・幼児教育学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年6月26日受付, 2023年8月3日受理)

要 旨

本研究の目的は、「和洋折衷」ではじまった明治期の唱歌教育を、「和」の視点から、論じることである。なかでも、わらべうたや日本民謡がどのようにあつかわれたかを視点とする。1881(明治14)年より音楽取調掛によって出版された『小学唱歌集』はその大半が西洋の楽曲で占められていた。しかし、西洋文化の偏重とその揺り戻しともいわれる国粹主義の影響をうけ、唱歌教育においても日本の伝統的な要素がとりいれられるようになった。そのひとつがわらべうたや日本民謡である。本論文では、国風音楽会、伊澤修二編纂の『小学唱歌』、及びさまざまな唱歌教科書に掲載された〈数え歌〉をとりあげる。

キーワード：国粹主義、唱歌教育、日本民謡

1 はじめに

明治期の唱歌教育は「和洋折衷」という文脈で語られることが多い。「和洋折衷」の語は、伊澤修二が1879(明治12)年、音楽取調掛の設置にあたり、文部省に提出した「音楽取調ニ付見込書」に登場する¹。同見込み書には、唱歌教育を実施するにあたっての事業方針として「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シ今日我国ニ適スベキモノヲ制定スルヲ務ムベシ」ことが書かれている。

これら「和洋折衷」の考え方にもとづいてはじまった明治期の唱歌教育は、「西洋音楽の受容」という観点から語られることが少なくなかった。山住正己(1967)は『唱歌教育成立過程の研究』において、音楽取調掛がどのように西洋音楽を受容し『小学唱歌集』を編纂したのかを論じている。同様に「西洋音楽の受容」を論点とする唱歌教育研究としては、中村理平(1993)の『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』、中村洪介(2003)の『近代日本洋楽史序説』、安田寛(1998)の『唱歌と十字架』などがあげられる。

また、奥中康人(2008)は『国家と音楽』のなかで、西洋由来の唱歌が「日本人の近代化」を図るツールとして機能してきたことを明らかにしている。同様に「日本人の近代化」を論点とする先行研究として、渡辺裕(2010)の『歌う国民』、酒井健太郎(2006)の『日本近代化と音楽—国楽・唱歌・五線譜—』などがあげられる。

すなわち、明治期の唱歌研究の多くは、日本人が西洋音楽をどのように受け入れ唱歌教育を試みたのか、また、唱歌教育は近代国家建設においてどのような役割を果たしたのか、を論点としてきた。

これに対し本研究では、「和」の視点から、日本の伝統的な要素がどのように取り入れられたのかを論じる。なかでもわらべうたや民謡が、どのようにあつかわれたのかを視点とする。なお、「和」の要素に着目した研究として塚原康子(2009)の『明治国家と雅楽-伝統の近代化/国楽の創成』があげられるが、わらべうたや民謡を視点としたものではない。

2 国粹主義の登場と国風音楽会の設立

1881(明治14)年より文部省は順次『小学唱歌集』を出版した。明治14(1881)年に出版された『小学唱歌集 初編』には、33曲が掲載されている。すべて外国曲である。第一巻の1から11までは、4小節または8小節の短い練習曲である。ルーサー・W・メーソンの著書、『プレパラトリーコース』からの選曲である²。12以降には、現在〈むすんでひらいて〉〈ちょうちょう〉〈蛍の光〉などの題名で知られる楽曲が掲載されている。

また、第二編には15曲が、第三編には42曲が掲載されている。現在、〈かすみか雲か〉〈庭の千草〉〈仰げ

ば尊し)などの名称で知られる楽曲に加え、日本の音階や旋律をもちいてつくられた楽曲が掲載されている。ただし、日本に由来する楽曲は第二編の3曲、第三編の5曲のみであった³。

これら『小学唱歌集』の評判は芳しくなかった。子どもは、外国曲を好まなかったからである⁴。明治26年に長野県でおこなわれた『小学唱歌集』の楽曲の嗜好調査では、西洋音楽系30名、雅楽系27名に対し、俗楽系を90名が好んでいたとの結果がある。また、文語調で難解な歌詞であるとの理由から、教師も同著に対して批判的であった⁵。

また、1880年代後半に入ると社会状況も大きく変化した。それまで無条件に取り入れてきた西洋文化を見直そうとする動きが活発になったのである。これは、ノルマントン号事件や井上馨の欧化政策が失敗に終わったことの影響も大きい。三宅雪嶺は1888(明治21)年に政教社をつくり、『日本人』を創刊した。創刊した当時の『日本人』の発行部数は当初は五、六百であったが、のちにその発行部数は数千部に達したといわれている⁶。

三宅、そして志を同じくする志賀重昂、陸羯南らは、西洋式の教育を受け、西洋の教師の影響を受け、西洋の言語、政治理論、哲学、歴史、文化などを学んだ。彼等は、欧米式の教育のなかで、一見、同じようにみえる西洋諸国が、実は独自の文化的伝統や国民性を大切にしていること、また、それぞれの国民がこれらを誇りとしていることに気づき、強力な国民精神が帝国主義時代における自己防衛に欠くことができないこと、国家的独立には文化的自律性の保持が必要であることを論じた。すなわち、日本の伝統文化を再評価し、独自性を定義することで、欧米人との対等な関係を築くことを目指そうとした⁷。これら国粋主義が、影響を与え、設立されたのが国風音楽会や唱歌改良会である⁸。これら団体の設立は、『音楽雑誌』などの専門誌のみならず、新聞の一般紙にもとりあげられた。欧米主義に反対し、日本固有の文化を見直そうとする考え方は、当時の人々の間に浸透していたのであろう⁹。

国風音楽会は、箏曲家である高野茂、宮内庁の高崎正風、貴族院男爵議員の高崎五六¹⁰、琴古流尺八奏者の荒木古童(二世)¹¹らによって、1889(明治22)年に設立された。同会の設立の目的は、次のとおりである。

日本人の表情を現すには日本固有の音楽ならざるべからず我邦固有の声に一種言可らざるの妙味あれば、現今世に存する所の妙曲の内更に其粋を抜き律呂の妙からざるところにこれを正し楽章の雅ならざるところはこれと改め以て我が固有の国風を永遠に伝えんというにあり(読売新聞：明治22年6月8日朝刊)

同会の目的となる処は、先ず現存の琴曲唱歌諸曲の中に就て其国風の正体となるべきものを撰み其改良すべきは之を改良し次に普く我国固有の俚歌童謡を野に求めて自然法を明らかにし新たに楽章を製して其譜を作り次に楽器を改良し以て国楽を興起するに在りと依て同会は一芸に秀でたる全国の技芸家を集め大いに建議する処あるよしなり。(読売新聞：明治22年6月26日)

国風音楽会は日本の音楽とは何かを理論的に明らかにするとともに、国楽を創造して後世に伝えることを目的に設立されていたことがわかる。なお、同会は翌年に研究所として、国風音楽講習所を設けている。その理由に「流派の如何を問わず曲の雅俗を論ぜず国風音楽を切磋する」と示されていることから、箏曲のみならずさまざまな日本の音楽をとりあげようとしていたことがわかる¹²。

高野は学校教育への参与も視野に入れていた。学校教育でオルガンがもちいられていることを「切齒痛憤にたへざらむや」と嘆き、「我国固有の音曲楽器もおおやけにご採用にならぬはあらじ、いかで此の事を成しとげむ」とも述べている¹³。

また、この時期には東京音楽学校存廃論争もおこっている。西洋音楽を中心に研究していた東京音楽学校へ批判が高まり、高等師範附属音楽学校に格下げされたのである¹⁴。『教育報知』には、次のような意見が掲載されている。

音楽学校は西洋音楽の奴隷にあらざるべく、亦た日本音楽の仇敵にもあらざるべし、自ら信ずる処の楽を奏して以て世間公衆に問う、是れ果たして何等の障害が損する希くは学ぶ処に偏る勿れ（教育報知：明治27年3月17日 413号）。

「音楽学校は西洋音楽の奴隷にあらざるべく」の表現からは、人々が西洋音楽に対して嫌悪感を抱いていたことがわかる。『教育報知』には「国風と音楽、教育と国風と音楽、この関係は決して瑣末の関係にあらず。井上文相既に意あり、嘉納氏にして決する処あれば適當の音楽を求むるにおいて何の難きことか是れあらんや」の意見、「教育に採用する音楽の選定を望む」という小見出しのもと、「速やかに教育に用うべき音楽を選挙し、以て衆庶の心を安らからしめよ、若し夫れ現行の唱歌に至りては、飽まで之か中心を切望して止まらず」などの意見もみられる。

また、当時、高等師範附属校長となった嘉納治五郎の言も掲載されている。

附属音楽学校、国風音楽講習所、日本雅楽協会等の人々を一堂に集め、最も勇壮なるもの最も悲哀なるもの、最も優美なるもの、この三者の比較奏楽をなさしめ、後ち教育に応用すべき音楽の大方針を決定しては如何（教育報知：明治27年3月17日 413号）

実際に、比較奏楽等をおこなった形跡はみられないものの、国風音楽会を中心に日本の音楽を構築することが進言されている。日本の音楽を教育に導入しようとする動きが活発化していたことがわかる。

国風音楽会は数多くの箏曲や尺八、地歌箏曲などの演奏会を企画するとともに、その後の日本音楽の普及に大きな影響を与えた¹⁵。国風音楽会によって、どのように日本の音楽が収集されたのか、音律や楽器の研究がどのようにおこなわれたかについて、その具体は明らかになっていないが、国風音楽会が「日本らしい音楽とは何か」を追究していたことは疑いない。なお、日本の学校教育において「祝日大祭日歌詞並楽譜」が制定されたのは、明治24（1891）年から明治26（1893）にかけてである。明治22（1889）年に民間の側からも、日本の音楽の普及を目的とした国風音楽会が設立されていたことは、注目に値する。

3 唱歌改良会の設立と『小学唱歌』

同時期、東京音楽学校校長を辞職した伊澤修二は、外山正一、矢田部良吉、穂積陳重、菊池大麓、田中館愛橋らと唱歌改良会を設立した¹⁶。その目的は『読売新聞』紙上に掲載されている。

氏（伊澤修二）は音楽の学理に暗からざれども、（中略）国歌の素法と韻調あることを知りたれば断然昨非と改め歌格復古の節を唱え朝野有志の賛成を得て斯の唱歌改良会なる一団を組織し飽まで音楽上の学理と研良し第一着には古歌の素法に規り韻調に従って歌譜と改良し目下私編刊行の小学唱歌集等も漸を追うて改むる（読売新聞：明治25年5月19日）¹⁷（ ）は筆者による補足

唱歌改良会がめざしたのもまた、「歌格復古」であった。なお、この時期には、軍歌を含む数多くの民間唱歌集が出版され、学校教育でもちいられていた¹⁸。このようななか、伊澤らは、西洋音楽中心の『小学唱歌集』を改め、日本の伝統にもとづいた新たな教科書をつくらうとしたのである。

こうして、出版されたのが、『小学唱歌』である。明治25（1892）年、明治26（1893）年に第一巻、第二巻がそれぞれ出版された。『小学唱歌』は全六巻で構成されているが、本研究では義務教育である尋常小学校用の第一巻、二巻を検討する¹⁹。

第一巻の緒言には、七つの項目が記されている。歌詞と楽曲については次のように述べられている。

- 一 本書の歌詞は、本邦固有の童謡を始めとして、新古に拘わらず、智徳の養成を益し、且つ歌調の興味あるものを撰び、又祝日大祭日に用うべき歌をも編入し、特に教育に関する勅語の旨意を貫徹せしめんことに、一層の用意を加えたり。

- 一 本書の楽曲は、広く東西古今の音楽家の作曲を採り、其旋法は、自然長音階、律旋法、及び俗楽調第一種に依るもの多し。而して第一巻は、全く本邦人の作曲のみに限り、漸次泰西諸家の作曲を交うるものとす。(下線は筆者)

「日本の童謡」かつ、「歌詞の興味あるもの」、特に、第一巻は日本人の作品のみを選曲したとされている。同著には挿絵、数字譜、歌詞や旋法の解説なども掲載されている。『小学唱歌集』への批判をうけ、改善を図ろうとした伊澤の姿勢がみてとれる。同教科書は、当時音楽教科書の範として高く評価されている²⁰。

当時の伊澤は明治23(1890)年に国家教育社を設立、民間の立場から「忠君愛国」を中心とする教育活動を展開していた²¹。『小学唱歌』の歌詞が「教育勅語の旨意の貫徹」であったことはよく知られている²²。

さて、『小学唱歌』は、第一巻17曲のうち、11曲が伊澤修二、2曲が小山作之助、1曲が林広守の作曲である、残り3曲が「未詳」である。このなかから、俗謡調とされる楽曲を一覧にまとめたのが表1である。

表1 『小学唱歌第一巻』 俗曲調とされる楽曲²³

| 楽曲名 | 作曲者 | 作詞者(童謡) |
|-----|------|--------------|
| からす | 伊澤修二 | 伊澤修二 |
| かり | 伊澤修二 | 伊澤修二 |
| 宮さん | 未詳 | 尊攘堂主人(品川弥二郎) |
| 手鞠歌 | 未詳 | 鶯花園主人 |
| 数え歌 | 未詳 | 伊澤修二 |

〈からす〉〈かり〉はいずれも、わらべうたの旋律である。ただし、伊澤修二作曲と記載されている。「未詳」の表記があるのは、〈宮さん〉〈手鞠歌〉〈数え歌〉でる。

〈宮さん〉は、当時の流行していた〈宮さん宮さん〉とほぼ同じ旋律である。〈数え歌〉は、明治20年に文部省音楽取調掛が編纂した文部省の『幼稚園唱歌』と同一である²⁴。

第二巻には、45曲が掲載されている。第1曲から第9曲までは、「五声音階」及び「律旋法五声音階」で構成された短い練習曲が掲載されている。その後の36曲の内訳は、伊澤が2曲、小山作之助など、日本人作曲家によるものが13曲、外国人によってつくられた曲が2曲、及び作者不詳の楽曲が19曲である。

同著には、「五声音階」「律旋法五声音階」「自然長音階」「ト調」「ヘ調」「二調」「変ロ調」「イ調」「壱越調」「黄鐘調」「平調」「盤渉調」「俗楽調第一種」「俗楽調第二種」の説明も掲載されている。着目すべきは、「俗楽調第一種」「俗楽調第二種」の音階である。



図1 俗楽調第一種



図2 俗楽調第二種

伊澤は、現在の五音音階とは異なる理論で「俗楽」の音階をとらえていたことがわかる。

表2は第二巻において、俗楽調とされた曲を一覧に整理したものである。なお、〈うさぎ〉〈子鼠〉〈養老の滝〉は俗楽調一種、〈高い山〉〈水鳥〉は俗楽調二種とされている。

表2 『小学唱歌第二巻』 俗楽調とされる楽曲

| 楽曲名 | 作曲者 | 作詞者 |
|------|-----|------|
| うさぎ | 未詳 | 未詳 |
| 子鼠 | 未詳 | 未詳 |
| 養老の滝 | 未詳 | 足代弘訓 |
| 高い山 | 未詳 | 未詳 |
| 水鳥 | 未詳 | 未詳 |

〈うさぎ〉の旋律及び歌詞は、現在の教科書に掲載されている歌唱共通教材とほぼ同一である²⁵。

第一巻、第二巻の歌詞の内容をみてみよう。第一巻には忠君愛国をうたった歌詞が多く掲載されている。一方、第二巻には楽典的な内容とその解説に加え、動物や風景などを表現した歌詞が多い。すなわち、第一巻は伊澤の信念にもとづいて、また第二巻は『小学唱歌集』への批判に答えようとして編纂にあたったのであろう。だとすれば、第二巻の俗楽は「難解な歌詞」「愛好されない旋律」という課題を解決するためにもちいられたことになる。

このような考え方のもと、掲載された一曲が図3に示す〈カラス〉である。

図3 〈からす〉『小学唱歌1』より

上記、〈カラス〉について、批判的な見解をもつ後の研究者は少なくない。これは、わらべうたの旋律であるにもかかわらず、その終止音がト音であることに起因する。たとえば、山住は伊澤がわらべうたをとりいれたことを評価しながらも、終止音のト音について「わらべ唄の原型どおりではなく、きわめて不自然な終止」「原形を強引にゆがめて、ヨーロッパ音楽と似たような終止にしてしまった」と分析し、「そのとりあげかたには非常に大きな問題があった」（園部・山住1972,99）と指摘している。また、岩井正浩も同じく終止音をとりあげ、「子どもの伝統的なわらべ歌を骨抜きにしている。」（岩井2009,120）と非難している。

果たして伊澤は意図的に西洋音楽と似たような終止にしたのだろうか。確かに、〈カラス〉の調号はシャープひとつである。これを、ト長調としてとらえれば、主音はト音である。おのずから終止音もト音となる。しかし、他の俗楽調の曲の終止音は必ずしも主音ではない。なぜ〈カラス〉の終止だけが、ダイアトニック音階の主音で書かれているのだろうか。

筆者はその理由を『小学唱歌』が編纂された時期には、まだ俗楽の音階の研究が確立されていなかったからだと推察する。これは、伊澤が『小学唱歌』に示した「俗楽調第一種」「俗楽調第二種」の楽譜が七音で構成されていることから明らかである。同理論を適用すると、〈からす〉のト音は終止音ではないものの、「俗楽調」の構成音のひとつとなる。

なお、同理論について、上原六四郎は『俗楽旋律考』のなかで、「伊澤氏は俗楽の音階は西楽が如く七音より成りて、第一種及び第二種の二音階あるが如く論ぜられ」と述べ、「予も明治十四五年頃までは」ほぼ同説であったが、研究を重ね、俗楽の音階が五音でできていることを究明したことを明らかにしている²⁶。すなわち、上原の理論や、または、現在主流である小泉理論が五音音階であることを鑑みると、当時の伊澤の俗楽の音階に対する考え方そのものが、現在とは異なっていたことになる。これは、伊澤の採譜や音階に対する考え方を、現在の理論にあてはめ、その正誤を指摘することはできないことを意味する。

ましてや、民謡やわらべうたは自然発生的にうまれた音楽である。音楽理論を学んだ職業的音楽家が作曲し、作りだした音楽ではない。現在主流である民謡やわらべうたの理論は、研究者が民謡やわらべうたを収集し、その共通項を見だし、西洋音楽という枠のなかで「後出し」として作り出したものにすぎない。すなわち、理論に合致しない音が存在するのは当然である。後世の理論にあてはめて〈カラス〉が解釈できなかったことは非難されるべきものではない。

民謡やわらべうたの歌詞は、時代によって、土地によって変容する。変容性を有する音楽こそが民謡やわらべうたである。伊澤がつくった〈からす〉もまた、ヴァリアンテのひとつである。にもかかわらず、伊澤の〈カラス〉は、「日本の音楽を骨抜きにした」とまで批判されているのである。

そもそも、この時期の伊澤に日本の音楽を西洋風にかきかえるメリットはない。伊澤は純粋に唱歌教育を普及させるがために、学校教育に「俗」の音楽をとり入れたのではないだろうか。

4 わらべうたや民謡をもとにつくられた唱歌

「俗」の旋律を取り入れ、唱歌をつくったのは伊澤だけではない。『小学唱歌』に掲載された〈数え歌〉は、同じ旋律、異なる歌詞で数多くの教科書に掲載されている。たとえば、1887（明治20年）に真鍋貞造が出版した『幼稚園唱歌集』には〈一ツトヤ〉のタイトルで、1888（明治21）年に吉田鈺橋が発行した『尋常唱歌集』には〈手鞠歌〉というタイトルで、その他、飯田初造（出版年不明）〈幼稚園まり歌〉、菟道春千代（1887）〈改良てまり歌〉、菟道春千代（1887）〈小学校幼稚園生徒修身運動歌〉、さらには、後に文部省の『尋常小学唱歌』にも掲載されるなど枚挙にいとまがない。吉田の例言には次のような記載がある。

守謡や数え歌は庭の訓に尤も大切なるものなり。然るに吾邦の守謡数え歌等概し猥褻野卑にして取る可きもの少なし。これ余が世の識をかえりみずこの稿を起こしたる所以にして聊旧来の弊を矯正せんとするの微意なり（吉田1888,例言）。

当時はさまざまな教科書の作り手が、淫猥野卑な子守唄や数え歌を矯正して、新しい唱歌をつくらうとしていたことがわかる。

もともと、〈数え歌〉は目賀田種太郎がアメリカ留学中に採譜をした一曲である。また、1874（明治7）年の郵便報知新聞にも「東京繁栄の鞠歌」のタイトルで歌詞が掲載されている。また、明治10、11年頃には「民権数へ歌」として流行している²⁷。〈数え歌〉は当時の人々にとって、よく知られた旋律だった。

また、当時は流行歌を改良して、日本の愛唱歌にしようとする動きもあった。1891（明治24）年の『音楽雑誌』には、次のような記事がある。

吾邦にては今様節、詩吟、都々逸、大津江節或いは流行唄の如きは皆動かす可からず曲節にして日に日に新文句を替え月に年に其時代の現況を綴りて唄うが故に其感情は益々深くなりていうにいわれざる興味を覚ゆる用になり。又西洋にても曲ありて歌を替作する事は現に世に隠れなき「マルセーユ」なる軍歌の如きは先に曲ありて後に歌付けたる等其例最も少なからざるなり。（中略）西洋の有名なる某博士が学校や教会に用いる歌曲は高尚優美なれども俗間に行わるる処の悪魔の曲よりは其勢力甚だ薄く若し此悪魔の曲を採用して是に正歌を替え後世に遺さば必ず名曲名歌となるべしとて之を採用せしに果して数十年を出でざる中に名曲として世に賞されし（作者不明1891,26-27）

日本には古くから替え歌の文化が存在していること、替え歌は人々に浸透しやすいこと、西洋にも同じように替え歌文化が存在していること、が書かれている。また、同著には楽曲の例として〈ひとつとや〉を原曲とする〈数え歌〉（『幼稚園唱歌』に掲載）、〈子守唄〉を原曲とする〈教え草〉（『家庭唱歌集』に掲載）、〈お江戸日本橋〉を原曲とする〈東洋亜細亜〉（『守謡撰曲唱歌集』に掲載）などが示されている。すなわち、教会や学校でもちいられる曲よりも、俗の音楽を採用してその歌詞を変える方が名曲として長く残るのではないか、という提言である。

その具体をみてみよう。1887（明治20）年に文部省音楽取調掛が出版した『幼稚園唱歌集』の〈数え歌〉の歌詞は次の通りである。

一つとや 人々一日も忘るなよ 忘るなよ
はぐくみそだてし おやのおん おやのおん

二つとや 二つなきみぞ 山桜 山桜
ちりてもかおれや きみのため きみのため
(以下略)

親に対する感謝や花鳥風月がうたわれている。なお、三連以降には「幼稚園」「兄弟」「学び」などをキーワードとする歌詞が掲載されている。

伊澤の『小学唱歌』に掲載された歌詞は次の通りである。

一つとや ひとと生まれて忠孝を 忠孝を
かきては皇国の人でなし 人でなし
二つとや ふた親兄弟うちそろい うちそろい
楽しく暮らすも 君の恩 君の恩
(以下略)

『幼稚園唱歌』に比べると「忠君愛国」を意識した歌詞であることがわかる。なお、三連以降には、「父母」や「先生」のキーワードに加え、「やまと心をやしないて君と国につくすべし」や、「皇国のほまれをあげよう」など歌詞がみられる。

j53次に紹介するのは、長野県の教員、大野うのが、1886（明治19）年につくった〈コレラ病予防の歌〉の歌詞である。

一つとや 人のコレラを聞く度に聞く度に
自分の用心怠るな 怠るな
二つとや 平生住居を奇麗にし奇麗にし
芥溜下水を掃除せよ 掃除せよ
(以下略)

〈コレラ予防の歌〉は、村内の子どもたちが真面目に、暗記して歌ったという報告もある²⁸。松下直子はこれら改良歌の歌詞を分析し、内容を次のように分類している。

表3 改良歌の分類（松下1980）をもとに筆者が分類

| | |
|-------|--|
| 生活指導歌 | 子どもの務めを記した歌、勸学歌、保健衛生歌など子どもたちおよびその父兄の生活指導を目的とした歌 |
| 学業歌 | 当時盛んにつくられた地理歌にみられるように、その学科内容を歌詞にし、生徒にそれを暗記させようとする歌 |
| 勸業歌 | 工業、農業に関することを歌い、労働者を対象として作られた歌 |
| 徳育歌 | 君への忠、親への孝などの教をうたった歌 |

上記の分類は、現在、学校教育であつかわれるうたとも共通点が多い。コロナ禍において、手洗いうがいを励行するうたがつけられたことは記憶にあたらしい。かけ算九九のうた、歴史のうたなど、うたをもちいた学習は今もおこなわれている。KIROROの〈未来へ〉をはじめ、卒業式で歌われるうた、特に親や先生に感謝をこめて歌われる合唱曲は、現代版の徳育歌といえることができるだろう。すなわち、うたを通して文化を共有させようとする姿勢は、今も昔も変わらないことになる。

5 おわりに

唱歌教育は、1881年（明治14）に音楽取調掛によってつくられた『小学唱歌集』によってはじまった。西洋音楽中心でつくられた『小学唱歌集』の評判は芳しくなかった。そのようななか、西洋文化の偏重とそ

の揺り戻しともいわれる国粋主義の登場により、明治20年代には日本の音楽をとりいれた唱歌教育が模索された。

高等師範附属音楽学校校長、嘉納治五郎は国風音楽会や雅楽協会等の音楽をとりいれて、「教育に応用すべき音楽の大方針を決定」することを模索していた。また、伊澤修二は日本の伝統的なうた、及び日本人の手によって作曲された楽曲を中心とする『小学唱歌』を出版した。また、当時の教科書には〈数え歌〉の歌詞をいれかえた楽曲が掲載された。その目的は、人々に愛好される唱歌をつくることにあった。

唱歌をもちいて庶民を国民化するという目的は、学校で唱歌がうたわれる前提のもとに成立する。人々が愛好する旋律をもちいて改良歌をつくり、子どもたちに広く行き渡らせることは、卑俗なうたの撲滅という風俗上の観点からも、また、庶民を国民化するという観点からも意義があった。わらべうたや民謡は、明治20年代の唱歌教育をすすめるとともに、庶民の国民化をすすめる役割の一端を担っていたといえるだろう。

〈付記〉本研究は日本学術振興会科学研究費（課題番号：22K02848）の助成を受けている。

引用・参考文献

- 青柳善吾（1979）『本邦音楽教育史』青柳寿美子。
 伊澤修二（1892）『小学唱歌1』大日本図書。
 伊澤修二（1892）『小学唱歌2』大日本図書。
 岩井正浩（2009）『子どもの歌の音楽文化史的研究：日本伝統音楽を視座とした1900-1940年の展開』神戸大学博士論文。
 上原六四郎（1927）『俗楽旋律考』岩波書店。
 奥中康人（2008）『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』春秋社。
 栗田廣治（1894）「国風音楽改良談」『中京文学』(17)17-19。
 ケネス・B・パイル/ 松本三之助監訳・五十嵐暁郎訳（2022）『欧化と国粋 明治新世代と日本のかたち』みすず書房。
 薦田治子（2000）『当道音楽としての平家』お茶の水大学大学院博士論文。
 酒井健太郎（2006）「日本近代化と音楽—国楽・唱歌・五線譜」筑波大学博士論文。
 杉田正夫（2005）『学校音楽教育とヘルバルト主義』風間書房。
 園部三郎・山住正己（1962）『日本の子どもの歌—歴史と展望—』岩波新書。
 大日本女子興風会（1893）「国風音楽講習所と高野茂氏」『女子興風雑誌』(4) 23。
 塚原康子（2009）『明治国家と雅楽—伝統の近代化/国楽の創成』有志舎
 東京芸術大学音楽取調掛研究班（1976）『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社。
 遠山文吉・高橋浩子・佐藤晋（1976）「学校教材の作成と教授法研究」『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社。
 長尾玄三太（1893）「和漢洋楽嗜好試験」『音楽雑誌』(38)音楽雑誌社。
 中村洪介（2003）『近代日本洋学史序説』東京書籍。
 中村理平（1993）『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋学史序説—』刀水書房。
 堀内敬三（1948）『音楽五十年史新版』鱒書房。
 増井敬二（1984）「『音楽雑誌（おむがく）』解題」『音楽雑誌補巻』出版科学総合研究所。
 松下直子（1980）「唱歌と猥歌追放」『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社。
 真鍋貞造（1887）『幼稚園唱歌集』普通舎。
 文部省音楽取調掛（1881）『小学唱歌集 初編』文部省。
 文部省音楽取調掛（1883）『小学唱歌集 第二編』文部省。
 文部省音楽取調掛（1884）『小学唱歌集 第三編』文部省。
 文部省音楽取調掛（1887）『幼稚園唱歌集』文部省。
 安田寛（1998）『唱歌と十字架 明治音楽事始め』音楽之友社。
 山住正己（1967）『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会。

吉田鈺橘（1888）『尋常唱歌集』大成堂。

渡辺裕（2010）『歌う国民—唱歌，校歌，うたごえ』中公新書。

¹ 1878（明治11）年4月8日にアメリカから目賀田種太郎と伊澤修二の連名で文部省に送付された「学校唱歌をおこすのに必要な音楽取調事業をおこなうべきだという上申書」に由来する。同上申書には「彼我和合シ一種ノ楽ヲ興サバ」の表記がある。また、同月中に目賀田の名前で送付された「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込」には、「我邦古今ノ固有ノ詞歌曲調ノ善良ナルモノヲ尚研究シ其ノタラサルハ西洋ニ取り」の表記もある。

² 安田2015,360参照。

³ 第二編の〈鏡なす〉〈皇御国〉〈天津日嗣〉、第三編の〈富士筑波〉〈園生の梅〉〈橘〉〈四季の月〉〈百蓮白菊〉が該当する。

⁴ 明治26年に長野県松本町高等尋常小学校において同唱歌集に含まれる雅楽，俗楽，西洋音楽に対する嗜好調査がおこなわれている。長尾亥三太1893,13。他に山住1962,39，杉田2005,37等。

⁵ 山住1967,254参照。なお，唱歌歌詞が難解であるために解説書も出版されている。

⁶ ケネス・B・パイル2022,82。

⁷ ケネス・B・パイル2022,70。

⁸ 増井1984,21，杉田2005,53などを参照。

⁹ 中村2003,804。

¹⁰ 高崎五六は高崎正風の従兄弟である。

¹¹ 荒木古董は『俗楽旋律考』の著者である上原六四郎の師匠でもある。

¹² 大日本女子興風会1893,23。

¹³ 栗田廣治1894,18。

¹⁴ 格下げの理由には予算もある。

¹⁵ 薦田2000は，国風音楽会の後身である当道系の地歌箏曲演奏家の組織，財団法人国風音楽会が今日まで平家の伝承を守ってきたことを明らかにしている。

¹⁶ 堀内1948,60。

¹⁷ 明治25年に発刊された『音楽雑誌』第20巻にも同様の文章が掲載されている。

¹⁸ 明治5（1872）年の学制において「当分之ヲ欠ク」とされていた唱歌科は，明治14（1881）年の小学校教則綱領において教育内容が規定された。ただし，この時点では必修科目ではなかった。唱歌科が必修科目になるのは，明治40（1907）年の小学校令改正である。このとき，文部省が編纂したのが『尋常小学唱歌』である。それまでは，唱歌科の授業では文部省による『小学唱歌集』及び，民間の教科書が多くもちいられていた。いわゆる教科書検定制度は明治27（1894）年の訓令第七号「小学校唱歌用歌詞楽譜採用に関する通牒」による。以降は，文部大臣の検定を経た教科書教材，文部大臣が選定した教材，地方長官において文部大臣の認可をうけた教科書が使用されることになった。したがって，明治20年代から明治27年までは文部省の検定を受けないさまざまな教科書が使用されていたことになる。

¹⁹ 第三，四巻は高等小学校女子用，第五・六巻は高等小学校男子用であるため，本研究ではあつかわない。

²⁰ 青柳1979,171。

²¹ 奥中2008，第五章「德育思想と唱歌」に詳しい。

²² 山住1967，中村2003，杉田2005，奥中2008などがあげられる。

²³ 俗曲調の分析は杉田2005による。

²⁴ 『幼稚園唱歌』に作詞者，作曲者の記載はない。

²⁵ 現行（2023）年の音楽科の教科書に歌唱共通教材として掲載された歌詞，及び旋律は同一である。ただし，『小学唱歌』が4/8拍子と記載されているのに対し，現行の共通教材の楽譜には2/4拍子の表記がある。なお，現行の教科書には「日本古謡」と表記されている。

²⁶ 上原1927,43-44。そもそも上原は伊澤ら，そして自身がおこなってきた俗楽の研究について「疑惑の箇所少なからず」と考えていた。「今回東京音楽学校校長村岡範為馳氏の命あるに依り，敢て聊か之が論説を今日に試む」（上原1927,30）との記述がある。

²⁷ 中村2003,754-757

Nationalism and Shoka Education in Meiji Japan : Focusing on Warabeuta and Japanese Folk song

Kayo JO

Department of Early childhood and Elementary Education, Faculty of Humanities Kyushu Women's University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi City Fukuoka, 807-8586, japan

Abstract

The purpose of this study is to discuss Shoka education during the Meiji period, which began with a “blend of Japanese and Western styles. The majority of the “Shogaku-Shoka-Shu” published by the Ongaku-Torisirabe-Kakari from 1881 consisted of Western compositions. However, under the influence of nationalism, which was said to be a reversal of the Western cultural emphasis, traditional Japanese elements began to be incorporated into Shoka education as well. One of these is Warabe-uta and Japanese folk songs. This paper will focus on Kokufu Ongakkai, “Shogaku-Shoka” and “Kazoe-uta.

Keyword: Nationalism / Shoka Education / Japanese Folk songs